

## 論 説 血友病治療の提供

### Editorial

#### The delivery of treatment for haemophilia

2002年2月、世界保健機関（WHO）、世界血友病連合（WFH）および国際血栓止血学会（ISTH）の後援により Royal Free Hospital（ロンドン）の Haemophilia Centre & Haemostasis Unit で会議が開催されたが、以降のページに収載した一連の論文（*Haemophilia* Vol. 9 No. 4 に収載されているすべての論文）はこの会議のために作成された論文である。また、WHO によりこの会議の会議報告が発表されている [Delivery of Treatment for Haemophilia, London 11–13 February 2002 (WHO/WFH/ISTH/WG/02.6)]。

### 緒 言

血友病治療はコスト高であるとともに、複雑である。この複雑さの原因として、血友病が稀な疾患であること、生涯にわたって持続すること、疾患の重症度が変化しやすいこと、世間一般の感覚では患者が重大疾患に罹患していることがわかりづらいこと、が挙げられる。迅速かつ適切な治療が行われない場合は、結果として入院が長期化したり、より多くの血液製剤が必要となることも稀ではない。

凝固因子の欠乏度によって出血の重症度および発生頻度が異なってくることは既に証明されているが、関節血腫を予防する上で必要とされる正確な凝固因子レベルについては未だ明確ではない。また、1990

年以降、治療法についてはかなり統一されてきているが、投与方法については未だ見解が一致していない。

「血友病治療の提供 (The Delivery of Treatment for Haemophilia)」と題された今回の会議は、1990 年以来 WHO と WFH により開催され、WHO Human Genetics Programme により支援された血友病治療に関する定期会合の 1 つである。「投与方法」は最近益々重要な問題となってきた。また、ISTH もこの会合に加わり、特に臨床検査診断、検査の質的管理および免疫寛容導入療法に関して ISTH が取り組んでいるプロジェクトの資料を提供している。この会議が、先進国のみならず、資源の乏しい国々における費用対効果の高い血友病治療戦略の確立と、それに関する研究の一助になることを期待する。

### この会議への出席者

Dr Victor Boulyjenkov, Human Genetics Programme, WHO; Dr Jean Emmanuel, Blood Safety Programme, WHO; Prof. Christine Lee, WFH, Liaison with WHO; Line Robillard, Chief Executive, WFH; Prof. Donna DiMichele, Chair, FVIII/FIX Subcommittee, ISTH; Dr Trevor Barrowcliffe, NIBSC, UK; Prof. Erik Berntorp, Malmo, Sweden; Dr Ampaiwan Chuansumrit, Bangkok, Thailand; Dr Miguel A. Escobar, Houston, USA; Dr Kathelijne Fischer, Utrecht, The Netherlands; Dr Jørgen Ingerslev, Aarhus, Denmark; Sam Schulman, Stockholm, Sweden; Prof. Alok Srivastava, Vellore, India